「死にたいの？一緒に死んでやろうか？」

初めて会話を交わした

そして初めての出逢い

「別に死にたい訳じゃ無い」

彼は少し薄笑いを浮かべ

「そーなんだ」

ポケットからガムを取りだし一口

残りを私に勧めてきた

何故か私はそれを受け取り口にほり込んだ

「オバさん！何してたの？」

「オ・オバさん って・失礼な。そんな歳では無い！私は…。」

「あ～オバさん って言われて感情的になるのは、や っぱりイイ歳なんだ ァ～(笑)」

「ちょ っと！アンタ。幾ら何でも言い過ぎ」

「ハハハ・。ちょ っと元気出たみたいだね。反抗出来るぐらいだから(笑)」

「あ…有り難う～てか!私は自殺する気は無い って！」

「じゃ何だったの？見てて死にそうだったよ」

「それは～考え事してただけで・・・」

「そ～なんだァ。まぁアンタ1人死んだところで世の中は何も変わらないけどね」

「……。言われてみれば～そーだな・・ってだ・か・ら自殺する気は無かったの」

「はい！はい！わかりやした～っと！」

彼はそう言うと背を向けて歩き出した

「ちょっと！」

私の言葉に彼は振り向いた

「何？」

「ん…。ガム有り難う」

「ちょっと！」

「何？まだ何か」

振り向いた彼の顔は眩しかった

「いや…何かさ。良かったら飲みにでも行かない？かなぁ～って」

「良いけど！ 俺また未成年だよ(笑) イイのかなぁ」

「え…」

私のビックリした顔を見て

「お礼の つもりならジ ュースでもオゴ ってよ」

気が付いたら コンビ ニの前で

２人で缶珈琲を飲んでいた

「これで良か ったの？食事でもオゴ ってあげても良か ったけど」

「何それ？自殺する つもり無か ったのにオゴ ルって？オバさん変わ ってるね。何処の誰とも判らない俺に缶珈琲をオゴ ってオ マケに食事 に誘うなんて･･･それとも何か企んでる？例えば援交とか(笑)」

「な、何言 ってんの！そんな つもりは全く無 いこう見えても私には彼氏が居るんだから！」

「へ～ そーなんだぁ」

彼はそう言うと

顔を横 に向け残りの珈琲を

一気に口に入れ頬 っぺたを膨らませ飲みほした

その時も私は見とれていた

何故だかは分からなか ったけど

確実に彼にくぎ付けにな っている自分に気付きながら

何を話そうか?と思索を練 っていると

「じゃ俺 用事あるからこれで。缶珈琲ご馳走さん」

「あ!う、うん。じゃあ またね」

「また?変な挨拶だなぁ〜(笑)」

「そ〜だね変な挨拶だね」

「フフ‥。悩みはオバさんの彼氏に相談しなよ。1人で悩んでないでさ」

「うん!有り難う… ってオバさんじゃ無 い何度言わせるの」

「ハハハ‥」

彼は笑いながら

ダッシ ュで走 って行きました

背中を向けて左手を軽く振りBYE-BYE の仕草で…

私は彼 の後ろ姿を彼が見えなくなる迄見 つめていました

そう

これが彼と私 のロマンの始まり

宿命 の糸車が回り始めた出会いでした

続く‥‥